

源氏物語「本文と享受」の方法（V）

岩下光雄

(I)

一、「面影」の語誌と物語の享受（I～II）

二、「首書源氏物語」玉鬘の巻の本文と物語の享受

（I～II）

(II)

二、「首書源氏物語」玉鬘の巻の本文と物語の享受

（III～IV）

三、「源氏物語の本文と享受」（和泉書院）

要旨・享受をめぐる問題(I)

(III)

三、「源氏物語の本文と享受」（和泉書院）要旨・享受

をめぐる問題（I）付（I）・付（II）

(IV)

三、「源氏物語の本文と享受」（和泉書院）要旨・享受

をめぐる問題（I）付（III）

『伊勢物語』の方法と『源氏物語』の享受

― 第一段・第二段をめぐる問題 ―

(V)

四、宿木の巻疏注

― 「心ときめき」「顕証」などの語をめぐる論 ―

四、宿木の巻疏注

—「心ときめき」「頭証」などの語をめぐる論—

I

宿木の巻の「薫、中の君から異母妹浮舟のことを聞く」（小学館『全集』・436頁）の条に、

さりげなく、かくうるさき心をいかで言ひ放つわざもがなと思ひたまへると見るはつらけれど、さすがにあはれな
り。あるまじき事とは深く思ひたまへるものから頭証に、はしたなきさまにはえもてなしたまはぬも、見知りたまへ
るにこそは、と思う心ときめきに、夜もいたく更けゆくを、内には人目いとかたはらいたくおぼえたまひて、うちた
ゆめて入りたまひぬれば、男君、ことわりとはかへすがへす思へど、なほいと恨めしく口惜しきに、思ひしづめん方
もなき心地して涙のこぼるるも人わろければ、よろづに思ひ乱るれど、ひたぶるに浅はかならむもてなし、はた、な
ほいとうたて、わがためもあいなかるべければ、念じかへして、常よりも嘆きがちにて出でたまひぬ。（『全集』441頁）

とある。『全集』「心ときめきに」の頭注に「次の「夜も……」の間に一呼吸おく。ふっと薫になびく気持になるのを、
夜更けの男女対面の場であることを意識して、心底におしこめる」（440頁）と注記する。「心ときめき」を中君の心情と
解しての注記であるが、これは語法、文脈の上から誤りである。「……と見るはつらけれど、さすがにあはれなり。」と、
薫に対しては敬語の言い方が省かれている。「……と思ふ心ときめきに、夜もいたく更けふくを」、「男君、ことわりと
はかへすがへす思へど、……念じかへして、常よりも嘆きがちにて」と、全く敬語表現が見られず、最後に「出でたま

ひぬ」とあるだけである。これに対して、中君には、「……と思ひたまへる」、「深く思ひたまへる」、「えもてなしたまはぬ」、「見知りたまへる」、「おぼえたまひて」、「入りたまひぬれば」と一貫して敬語表現が用いられている。興味深い頭注ではあるが、諸注が通説として指摘してきた従来の注記を妥当なものとしなければならぬ。ところが、『全集』は、「うちたゆめて入りたまひぬれば」を、『細流抄』の「いとまごひもせずしていり給へる也」を引く。玉上『評釈』（角川書店）は、中君が「自分を理解してくれていると喜びもする。そこに隙を見て、中の宮は姿を消した。」（216頁）とする。だが、「人目いとかたはらいたくおぼえたまひて」に対応するのは、

几帳の下より手をとらふれば、いとうるさく思ひならるれど、いかさまにして、かかる心をやめて、なだらかにあらんと思へば、この近き人の思はんことのあいなくは、さりげなくもてなしたまへり。（『全集』438頁）

とある部分である。中君は、ずっと薫に手をとられ続けていたのである。侍女達の手前を遠慮して、さりげなくふるまひ続けていたが、ちょっと油断をさせて、その手をのがれたのである。男女の微妙な心理の陰影をあます所なく描き尽している。心憎いばかりの深い趣が見られる。『全集』の頭注は男女の機微をとらえてなかなか粋であるが、既に指摘したように、語法や文体、文脈の上からはやはり従えない。そこには、物語作者の登場人物に対する褒貶による意識的な敬語の削除、あるいは戯画化による敬語表現の用い方の落差の相違・位相性が薫像の表出に見られると解すべきものであろう。

ところで、『源氏物語』に用いられている「心ときめき」という語形をもつ名詞、動詞の用例は『新釈』（吉沢）・『大成』（池田）などの索引によれば、次の十五例である。『新釈』本によって語例を示す。

(1) 〇宮の内にも心ときめきせしを、（賢383頁）

(2) 〇物あはれなる御気色を、心ときめきに思ひて、（権・282頁）

(3) 〇宮は、人のおはする程、さばかりと推し量り給ふが、すこしけちかき御けはひするに、御心ときめきせられて
(蜚・50頁)

(4) 〇かく心ときめきし給へるを見も入れ給はねば、御返りなし。(真・191頁)

(5) 〇心ときめきに見給ふ事やありけん(裏・247頁)

(6) 〇待ちつけ給へるも、心ときめきせられて(裏・248頁)

(7) 〇漏らし聞召さする事もあらば、よももて離れてはあらじかし、と心ときめきもしつべけれど、(菜上・292頁)

(8) 〇やうことなき所々は、心ときめきに聞えごちなどし給ふもあれば、(匂・359頁)

(9) 〇誠にいひならさむと思ふ所あるにやと、さすがに御心ときめきし給ひて、(紅梅・379頁)

(10) 〇わざと懸想だちてもてなさじ。なかなか心ときめきにもなりぬべし。(稚・51頁)

(11) 〇中納言は、一人臥し給へるを、心しけるにやと嬉しくて、心ときめきし給ふに(総・116頁)

(12) 〇「みづから」とさへ宣へるが珍らしく嬉しきに、心ときめきもしぬべし。(宿・261頁)

(13) 〇見知り給へるにこそはと思ふ心ときめきに、夜もいたう更けゆくを、(宿・289頁)

(14) 〇誰もく心ときめきしつべき御けはひをかしければ、(東・67頁)

(15) 〇「斯くなむ聞え給ふ」といふに、心ときめきして、(手・266頁)

これらの語例を、「誰が誰(何)を」という形で整理すると次のようになる。

(1)、六条御息所方の女房達が源氏との仲を・(2)、源内侍が源氏を・(3)、蜚宮が玉鬘の気配を・(4)、鬚黒が玉鬘を・(5)、内大臣が夕霧の様子を・(6)、夕霧が内大臣の下心を・(7)、夕霧が朱雀院の心を・(8)、高貴な家々が匂宮を・(9)、匂宮が中君を・(10)、八宮(姫君)が匂宮を・(11)、薫君が大君を・(12)、薫が中君を・(13)、薫君が中君を・(14)、弁など人々が

薫を・(15)、中将の君が浮舟の歌(妹尼の代作歌)を・

これによれば、解釈上問題があると思われる「(10) 椎本」については、以下で再検討を加えなければならないが、「誰が」が男であることには変わりがないと思われるので、「誰が誰(何)を」という性差の視点で集計すると、次のようになる。

女	男	誰が	計	誰(何)を	計
(1) (2) (14)	(3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (15)		3	(1) (2) (5) (6) (7) (8) (10) (14) (3) (4) (9) (11) (12) (13) (15)	7

(註) (8)は(10)に準じて男として扱う。

このように、「誰を」という視点、「心ときめき」の対象となるのが、男女による性差があるかという点では『源氏』の用例に関する限り無関係である。ところが「誰が」という視点では性差が見られる語のように思われる。確かに女性の用例も二〇％あるが、(2)、(4)はそれぞれ源内侍、弁というような老女であり、(1)も年増の女房と考えるべきで、男性や老女などに限られて用いられている。『源氏』には、こういう片寄りをもつ用語が見られ、一つの用語意識が存在するように思われる。また、「心ときめき」の語意が「物語」の世界として限られた意味を限定する傾向があるから、「誰を」という視点からその対象をとらえると、次のようになってくる。括弧内はその用例数、一例のものはその数を示さない。

中君(3)・光源氏(2)・夕霧(2)・匂宮(2)・玉鬘(2)・内大臣・薫・大君・浮舟・

「誰が」という視点では、薫が三例で「心ときめき」に思う人であった。以下鬚黒・匂宮などすべて一例である。

ところで、「(10) 椎本」は、『全集』頭注で「あへしらへば又我も心ときめきするやうに成物也と也」と『弄花抄』を

引き、「なまじそうするとかえって気をもむ種にもなるでしょう」(168頁)と現代語訳する。玉上『評釈』(角川)・岩波『大系』・新潮『集成』なども『全集』と同じ。『弄花抄』の説は、『細流抄』『孟津抄』『岷江入楚』などに継承され、『湖月抄』も前半の注記はそれによる。諸注集成の記述の後に

ふかくも心にしめ給はぬすさみわざをよのつねのけさうめきてもてなしてとかく思案し、返事なともし給はずは、かへりて心ときめきに成てをこがましかるべしと也、心ときめきとは人の我に懸想するをさればよとうけばりて心をうこかす心あり(延宝本版本『湖月抄』しるか本 四十五 八丁ウ)

とある。文意をたどりにくい部分もあるが、「ふかくも心にしめ給はぬすさみわざ」「返事なともし給はず」が匂宮を動作主としたもの、「とかく思案し」「心ときめきに成て」は八宮方の心情と一応は解すべきものである。『全集』など、現代の注釈書と一般で既に定説化の方向が見られる。ところが「心ときめきとは……」以下の注記は、「とかく思案し」「心ときめきに成てをこがましかるべし」と対応しない、「うけばりて心をうこかす心」とは矛盾するように見られる。この部分の季吟の注記は、従来の諸注、師説を集成したものではなく、語意についての新しい提言であったと解すべきではないだろうか。玉上『評釈』(角川)は「語釈」で

恋文あつかいして返事をかかないなら、いかにも恋を挑まれた女のように、男をためし、じらすことになり、かえって男の心をかきたてることになる。それは避けたほうがよい。(182頁)

と、注記する。「かえって男の心をかきたてる」、これが『湖月抄』のいう「うけばりて心をうこかす」ことではないのか。小学館『完訳』日本の古典 21の秋山虔氏の「現代語訳」も、「なまじそうするとかえって気を持たせる種にもなりましょう」(361頁)と解されている。玉上『評釈』(角川)の「語釈」や秋山『完訳』(小学館)の「現代語訳」に従い、「心ときめき」の人は匂宮と解すべきである。椎本の巻の本文「心ときめきにもなりぬべし」と「なほもあらぬ

すさびなめり」は完全に対応し、待遇する表現であり、八宮の心話的表現として匂宮に対する敬語を欠落させていると解すべきである。従来定説化されてきた椎本の巻の本文は、『評釈』（『語釈』）、『完訳』（『現代語訳』）によって訂正を加うべきであり、「(10)、匂宮が姫君を」と解すべきである。「誰が」という点で匂宮は、薫の三例につぐ一例となり、夕霧とともにやはり、「心ときめき」に思う人であった。

「心ときめき」の語は辞書的にどのように扱われてきたであろうか。小学館『新選 古語辞典』（中田祝夫編）は、「①胸がどきどきすること。期待などで鼓動が早くなること」として『源氏』宿木の巻「(12)」の語例をあげ、さらに「②心いそぐこと。あわてること。」として『宇津保』国譲・中の語例をあげる。小学館『日本 国語大辞典』（市古貞次ほか編）も「①期待や不安などで胸がどきどきすること。心はずむこと。はらはらすること。」、「②心が動転すること。あわてること。」と語意を二つに分類して示す。ところが『角川 古語大辞典』（中村幸彦ほか編）は、

心が「ときめく」こと。期待などで、胸がわくわくすること。心の動揺を示すが、「胸つぶる」とは違って悪いことには用いられない。(第二巻 449頁)

と記述する。『源氏』の用語十五例中、この『角川 古語大辞典』の記述にいささかはずれるかと思われるのは、「(10) 椎本」であるが、それは八宮方の心情と解する従来の定説による場合である。しかしこれを、匂宮が姫君を「心ときめき」に思うと解すると、『源氏』の全用例は、『角川 古語大辞典』の記述と完全に一致することになる。椎本の巻の語例は、やはり、そのように解すべきものだと考えられる。永井和子氏は「源氏物語の「おいびと（老人）」（『源氏物語の探求 第十五輯』風間書房）で、『源氏』には「おいびと」を「老齡の女房など」とする特異性が目立つとされ、「数の上からも三十九例はかなり多いと言えるであろう。ただし用例の上で結果的に限定されて用いられているからといって、絶対的にそれ以外には用いなかった、という逆の証明にはならない」（324頁）とされ、

三十九例のうち、一例をのぞいてすべて玉鬘系・宇治十帖に存在することの意味は無視し得ない。「おいびと」を内在せしめた虚構の方法は、源氏物語固有のものとして緊張と自在を体现する仕組みになり得ると思われる。物語という概念自体、客観的な事実を語るという形を取りつつ、語り手の主観的把握を前提としている面が意外に強いのはなからうか。(326頁)

と指摘されている。この指摘は、物語作者の用語意識や物語の方法の上で示唆するところが大きい。新潮『集成』『枕草子 上』(荻谷朴校注) 七七段「頭の中將の、すずろなるそら言をききて」に、

青き薄様に、いときよげに書きたまへり。

心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

「蘭省花時錦帳下」
らんせいのはなのときまんなちやうのもと

と書きて、

「末はいかにいかに」

とあるを、いかにかはすべからむ。(162頁)

とある。傍注に「心配していた内容でもなかったのだ」、頭注に、「あまり触れられたくない絶交の一件。」と注記する。清少納言三十歳前後の事を回想しての記述で、『源氏』(1) 賢木の用例と同列に考えるべきものと思われる。ただ解釈は、同氏の『解環』(同朋社)に「不快なことは先に延ばそうという回避的な気持ち働いて開けてみようとしなかったのであろう。従って、その「ときめき」は飽くまでも負の感覚」であったとする。また小学館『全集』(松尾聰・永井和子校注・訳) 頭注などに「悪口を言う相手のことだから、どんな手紙かと心配したが、そういうものでもなかった、の意」(『全集』171頁)と解するような類はいかがであろう。岩波『大系』(池田亀鑑・岸上慎二校注)に、

「どんな文かしらと期待に胸がときめいたがそれ程のこともなかった」(116頁)とあるのに従うべきではないだろうか。岩波『新大系』(渡辺実校注)は、脚注で「これも『いをの物語』と関係があるか」(90頁)とするが、七七段の結尾の盛り上りに対応、照応していくおおらかさは、やはり『角川 古語大辞典』の語意から逆に辿っていくのが適切な解釈のように思われる。田中重太郎氏(『全注釈』角川)も岩波『大系』に同じ。

既に冒頭に引用した小学館『全集』『源氏』宿木の巻・四四一頁の本文に見られる「顕証に」の語例についても注意しなければならぬ。「顕証」の語形をもつ動詞、形容動詞、名詞の類は、表記の問題はあるが、『大成』、『新釈』の索引によれば十二例で、両本ともに異同はない。ただ、浮舟の巻の用例について『大成』索引では「一説」として異説をあげている。『新釈』本によって語例を示す。

- (1) ○いきほひ殊に住み満ち給へれば、けしように人繁くもあるべし。(玉 392頁)
- (2) ○侍従の君けんぞし給ふとて、近うさぶらひ給ふに、(竹・398頁)
- (3) ○「侍従の覚え、こよなくなりにけり。御碁のけんぞ許されにけるをや。」(竹・398頁)
- (4) ○かの御碁のけんぞせし夕暮れのこともしひ出でて(竹・406頁)
- (5) ○かの慰め給はむ御さま、露ばかり嬉しと思ふべき気色もなければ、げにかの夕暮れのけんぞうなりけむに、いと斯うあやくなる心は添ひたるならむと、ことわりにおもひて、「聞召させたらば、いとどいかにけしからぬ御心なりけりと、うとみ聞え給はむ。」(竹・406頁)

(6) ○客人は、斯く顕証に、これかれにも口入れさせず、忍びやかに、(総・111頁)

(7) ○この老人の、おのがじ語らひて、顕証にささめきなどす。(総・111頁)

(8) ○あるまじき事とは深く思ひ給へるものから、顕証にはしたなきさまにはえもてなし給はぬも、見知り給へるにこ

そはと思ふ心ときめきに、(宿・289頁)

(9)〇「所のさまも、あまり川づら近く頭証にもあれば、なほ寢殿を失ひて、異さまにも造りかへむの心にてなむ。」

(宿・292頁)

(10)〇「女こそ罪深うおはするものにはあれ。すずろなるけそうの人をさへ惑はし給ひて、空言をさへせさせ給ふよ。」

(浮・105頁)

(11)〇「我は心に身をもまかせず、けんそうなるさまにもてなされたる有様なれば、覚束なしと思ふ折も、今近くて、

人の心おくまじく、めやすきさまにもてなして、行末長くをと思ひのどめつつ過ぐしつるを、(蜻・193頁)

(12)〇「御文御覽すべき人は、ここに物せさせ給ふめり。けそうの人なむ。いかなる事にかと、心得がたく侍るを、な

ほ宣はせよ。」(夢・328頁)

『大成』、『新釈』の索引から検索し得る語例は右の十二例である。小学館『日本 国語大辞典』は「けーしょう〔頭

証〕〔名〕〔形動〕〕として

(「けんしょう〔頭証〕の撥音「ん」の無表記)あらわなことを。いちじるしいこと。目に立つこと。また、その様

子。けそう。けんそう。(第七卷 182頁)

と注記し、『源氏』宿木〔8〕、『栄花』の用例をあげる。小学館『新選 古語辞典』新版(中田祝夫編)も「あらわで、はっきりしていること」(386頁)とする。この語に対する辞書類の注記は大同小異であるが、『角川 古語大辞典』の扱いは、「けんしょう〔ケンシヨウ〔見頭〕名・動サ変〕として、

囲碁・蹴鞠・双六などの競技に対して、勝負を判定すること。また、その人。競技の審判者。傍観者のときにも用いる。

とし、更に「形動ナリ」を別の見出し語に立て、

あらわなさま。おおっぴらで人目につくさま。露骨なさま。表立っているさま。晴れがましいさま。「けんぞ」「けんぞう」「けしよう」「けそう」とも。(同 377頁)

とする。品詞による意味の分類を試みている点が注意される。以下、これらの注記をもとに、十二の語例について検討を加える。

〔1〕玉鬢の巻は形容動詞で、紫上の侍女達が多く、玉鬢が人目につき目立つこと。〔2〕竹河の巻は名詞で、侍従が碁の勝負の立ち会い役をすること。〔3〕竹河もこれに同じで名詞。姉君のおぼえが格段で、碁の立ち合いを許していただいたこと。〔2〕、〔3〕は対偶的に表現され、照応する。〔4〕竹河の巻も名詞であるが、〔3〕の「けんぞ」の語を用いて、蔵人少将がかいま見したことを滑稽に言ったもの。〔2〕、〔3〕、〔4〕は、いずれも名詞で同次元の「場」として用いられ、『角川 古語大辞典』の品詞による意味分類「名・動サ変」の項の語意と一致する。ところが、〔5〕竹河の巻は形容動詞で、姫君がはっきりと見えたらしいがの意。小学館『全集』頭注などが注記するように、「かの慰めたまはむ御さま」は、「中の君のこと。玉鬢の手紙に「慰めきこえんさま」とあったのに対応」(5) 78頁)する。〔聞召させたらば〕の主語は玉鬢。〔4〕に語呂を合わせた洒落には違いないが、微妙に〔1〕玉鬢の巻の「けしように」の用語意識を揺曳した表現になっていることに注意しなければならない。このように、〔1〕玉鬢の巻から〔5〕竹河の巻に至る五例の用語には、それを操るしたたかな物語作者の用語意識が存在することを読みとっていく必要がある。

〔6〕総角の巻は形容動詞で、薫は大君との仲を、こんなに表立って誰彼に、の意。〔7〕も形容動詞で、弁などは薫を大君に逢わせることを、人目をばかることなくささやく意。薫の心情と侍女達の心情との相対する違いを「顕証に」の語によってきわ立たせ、戯画化していく作者の用語意識が、実に見事に浮彫りにされている。やはり、したたか

に操られた用語であることを読んでいく必要がある。

〔8〕宿木の巻「顕証にはしたなきさま」は、中君が、薫の懸想をあるまじき事とは思われながらも、あらわに、人目につくように困らせたり、恥をかかせたりするようなことはなさらないの意。やはり形容動詞の意味分類と一致している。〔9〕宿木の巻も形容動詞。宇治の八宮の邸が、宇治川の川面に近く、あらわで人目につきやすいので、寝殿を寺に造りかえようと、薫が、中君の内諾を得ているところ。この二つの語例は、「あらわで人目につく」という意味で対応する。それにしても、薫は、八宮邸が「顕証」なるゆえに寝殿を寺に造りかえようと中君に伝える、中君は、あるまじき薫の懸想を「顕証」にもてなすことはしない、という接近して用いられているこの対応的表現のなかには、薫が自己のアイデンティティを失いゆく姿を、アイロニカルに戯画化しようとする意識が働いているのではないか。八宮を仏道修業の師と仰ぎ、宇治通いを重ねながらも、救済と悟道との世界からは遙かに隔絶した闇のなかを彷徨する薫像が、「見知り給へるにこそはと思ふ」薫の「心ときめき」のなかに、宿業のように、見事に形象化されているように思う。「顕証にはしたなきさまにはえもてなし給はぬ」中君の心情を、薫は自分の「後見」役ゆえと思量して、屈折し、たゆむ、苦惱しながら、自我を確立していこうとする中君の心情に触れながらも、それを理解することができかねている。そして、薫は「あまり川づら近く顕証にもあれば」寝殿を寺に造りかえることを中君に伝える。「顕証に」の語は、人の心情の奥底の叫びから、物の外面の広がりへの関わりという、非情なるものへの転換を通して、ともかくも宗教的な世界を展望しようとする。

そこには、中君と薫との心情が、ぼんやりと折れてしまっている姿が戯画化されている。二人のあいあうことのできない、遙かに隔絶する絶望的な、孤独な魂の世界を、見事に描き尽しているのである。宗教的な魂の救済は、いわば「蜘蛛の糸」による形代のなかに、幻想的に存在するに過ぎないことを暗示しているようにも思われる。やはりそこに

は、したたかに操られた、鋭い作者の用語意識が存在していたことを読みとっていく必要がある。

〔10〕〔12〕は、最近の通説では別語と解されてきた。岩波『大系』では、それぞれ「眷属（けそう）の人」（五・225頁）・「見証（けそう）の人」（同・432頁）と漢字を当て、「（何でもない）従者」・「傍で見ている人」とする。小学館『全集』、『完訳 日本の古典』も岩波『大系』と同じ漢字を当て、「とるにもたらぬ家来衆の手前まで」（『全集』(6)・126頁）「ほとんど関係のない家来」（『完訳』十・34頁）。「はたの者」（『全集』(6)・276頁）、「私ども傍観者」（『完訳』十・237頁）とする。玉上『評釈』（角川書店）は、「眷属（けそう）」（第十一卷・76頁）「見証（けそう）」（同・578頁）の漢字を当て、今泉『首書本』（『源氏物語 下』桜楓社）『現代語訳 一〇』（桜楓社）は、「見証（けんそう）」（1169頁）、「見証（けそう）」（1203頁）の漢字を当て、よみ仮名をつけているが、意味は岩波『大系』などに同じ。これらと同じ注記は、吉沢『新釈』（平凡社）に既に見えている。しかし、『岷江入楚 第四卷』（中田武司編 桜楓社）には、浮舟、夢浮橋の巻の語に、

○河頭証

花けさうは一には見処の人をいふにやそはあたりの人をけんそといふべし

弄見証也そは成人をさへといふ也

秘見所の人かたはらそはあたりの人までと也箋（浮舟・544頁）

○河頭証人 又見所人

・見証人也弄

・見証・人也あたりの人は心えかたき様躰そといふ也

花箋に同じ（夢浮橋 771頁）

とあり、『河海抄』以下諸注を引用するが、これら古注では、浮舟、夢浮橋の巻の語を別語として扱っているようには見えない。ところが、延宝本版本『湖月抄』には、

○細見処の人也そはあたりの人までと也花同孟入道右府云其人数にてはなくてあるを校証の座といふ也。さまなき物まで心をまどはし給ふといふ心也。追問返答也(うき舟・廿五丁オ)

○抄あたりの人は心得かたき様寐そと也(夢のうきはし・一七丁ウ)

とある。『孟津抄』の入道右府の説は、既に最近の通説への傾斜を示しているのではないか。『源氏物語玉の小櫛』(本居宣長全集 第四卷『筑摩書房』)にも、

聞えにくきこと也、一本には、けんそうの人と有、(502頁)

とある。『孟津抄』、『玉の小櫛』のような注記が、最近の通説に影響を与えることが大きかったであろうが、特に『湖月抄』の引用が果たした役割は非常に大きいものがあつたと思量される。

『大成』(平凡社)によって本文の異同を調査すると、浮舟の巻では底本「けさうの人」が、榊原家本・三条西家本で「けむそう」となっているほかは、夢浮橋の巻には異同がない。底本は「けさうの人」である。宮内庁書陵部蔵青表紙証本『手習・夢の浮橋』(影印校注古典叢書 新典社)は「けさうのひと」で、校注者高橋文二氏は、

見證・頭證。「けせう」とも言う。また「けんそう」「けんそ」「けんぞ」とも訓む。

はっきり見えること、第三者として傍観すること、転じて第三者、あるいは菘、双六などの審判。はたの者は何が何だか判らないので、の意 (240頁)

と注記されている。ところが新潮社『集成』の浮舟、夢浮橋の巻の頭注には、

○何のかかわりもないはたの者まであたふたさせなさつて。時方自身のこと。「見証」は、はたから見ること。(八・

○ 私たちはたの者は。第三者、傍観者の意。(八・275頁)

とあり、両巻の語を別語としては扱っていない。注釈史の一端を辿っていくと、こういう『集成』の扱いが適切であり、『源氏』の語例に関する限り、品詞によって意味の分類を試みる『角川 古語大辞典』の記述が最も妥当であると思量される。但し、「傍観者のときにも用いる。」の後に、「転じて、第三者、傍観者の意。」という記述を加える必要があることは、指摘するまでもあるまい。『源氏』には、「けそうの人」の用例はこの浮舟、夢浮橋の巻の二例であるが、いずれも浮舟物語に関わる部分に用いられていることに注意しなければならぬ。「(10) 浮舟の巻の語例は、匂宮の浮舟への忍びあるきが、母、明石中宮や夕霧左大臣からとがめられるところとなる部分。匂宮のことを東山に僧に会いに行かれたと人前にはとりつくろっている。引用本文の時方の詞は浮舟の罪を指す。右近は、

聖の名をさへつけ聞えさせ給ひてければ、いとよし。私の罪もそれにて滅ぼし給ふらむ。誠にいと怪しき御心のげにいかでならはせ給ひけむ。かねて斯うおはしますべしと承らましも、いと忝ければ、たばかり聞えさせてましものを。あぶなき御ありきにこそは」とあつかひ聞ゆ。(『新釈』六 106頁)

と、お上手をいう。匂宮のとりつくろった弁解を逆手にとって、浮舟に聖という名をつけたのは大出来で、その功德で御自分の空言の罪も消滅するだろう。それにしても、匂宮がけしからぬたくらみ心を修業されたのはどうしてかと、宮を戯画化し、アイロニカルに描いている。「ほとんど関係のない、何でもない自分達のような第三者、傍観者」と解釈することによって、やはり夢浮橋の巻の「けそうの人」との対応、照応によるしたたかな用語意識を辿っていくことができるように思う。「(12) 夢の浮橋の巻の用例は、妹尼の詞。小君に托された薫の消息をご覧になるはずの人——浮舟はここにおいてになるようですが、「はたの者はどういふことなのかと合点しかねておりますので」(小学館『全集』(6)・

376頁)の意。諸注の問題、異同は全く見られない。両巻の語例は、浮舟を見つめる傍観者、はたの目、第三者であることに於いて一般的である。だが、浮舟の巻の用例は行く方知れずさ迷う、さすらう、寄るべなくたゆとう浮舟を見つめる、傍観者の捉える浮舟像である。そこには匂宮も浮舟も戯画化され、アイロニカルに描かれている。ところが、夢浮橋の巻に描かれた浮舟像には、妹尼の眼を以つても捉えきることのできない、主体的、自立的に生きようとする覚めつつある浮舟の自律的な姿が見られる。錯誤の人としての妹尼の人物像が、逆転して戯画化され、誇張化されアイロニカルにその立場を見事に変換して描かれていく。このように、作者のしたたかな用語意識によって操られた語例を「心ときめき」「顕証」の語群のなかに読んでいくことができる。そして、そういう物語享受の方法が確かに存在していた。「源氏」は、そういう一つの方法によって享受されていた物語であつたように考えられる。

II

宿木の巻の「中の君男子を出産 産養盛大に催される」(小学館『全集』・460頁)の条に、

大將殿は、「かくさへ大人びはてたまふれば、いとどわが方さまはけ遠くやならむ。また、宮の御心ざしもいと
おろかならじ」と思ふは口惜しけれど、また、はじめよりの心おきてを思ふには、いとうれしくもあり。(『全集』(5)・462頁)

とある、頭注に「中の君の幸福を願うべく、匂宮に縁づけた当初の心づもりを想起して思いなおす。このあたり、「……また……また……」の文脈で、薫の複雑に揺れ動く心情を表現。」と注記する。簡にして要を得た注のように見える。「日本 国語大辞典」(小学館)は「また(又・亦・復)」の見出し語のもとに副詞と接続詞による意味を分類し注記する。「補注」で、「また」は本来「再び」の意の副詞であつたが、漢文の「且・又・亦」などの訓読に用いられた結果、

接続詞の用法が発生したと考えられる。」(18・360頁)とし、「語源説」で「(1)マ(間)に、二つにわたる意の夕を添えたもの」以下「(8)までの語源説をあげる。副詞の意味として、「①同じ行為、状態がもう一度出現するさまを表わす語。再び。もう一度。」②一つの状態が他の状態と類似、あるいは一致すると認める気持ちを表わす語。同様に。同じく。」③一つの状態の他に、もう一つの別の類似、あるいは対立する状態のあり得ることを認める気持ちを表わす語。ほかに。さらに。他方。」④疑問文に用いて、事態をいぶかしがる気持ちを強調する語。一体全体。」⑤一つの評価、判断を強調して示す語。まったく。特に。」の五つをあげる。

接続詞の意味として、「①並列的な、または選択的な関係にある事柄を列挙することを示す。ならびに。あるいは。または。」②前の事柄に後の事柄が添加されることを示す。その上。さらに。そればかりでなく。」③「さてまた」の形で)前の事柄を受け、これと関連して存する事柄を取り上げ述べる時に用いる。他方また。そしてまた。」の三つをあげている。

『新釈』(吉沢)の索引によれば、『湖月抄』本『源氏物語』に用いられている「また(又、複)」の用例は六百四十例で、二つの品詞には分類していない。『大成』(池田)索引は副詞と接続詞に品詞分類して用例を示す。『大成』第三巻・177頁7行目にあるこの宿木の巻の二つの「又」は、接続詞と副詞とに分けられている。引用本文の傍線部「①」は『日本 国語大辞典』の接続詞「②」の語例。引用本文の傍線部「②」は、同じく副詞「③」の語例と考えての分類であると思量される。この用例の品詞・意味上の相違はかなり明確で、それを把握しておかないと文脈を正確に捉え、微妙な心理描写やその陰影を理解し、鑑賞していくことはできないように思う。ところが、「現代語訳」といわれる類のものはどうか。

○大將殿は、こういう風に母親じみてさえおしまいになっては、いよいよ自分のことなどは考えて下さらないであら

う。また宮の御寵愛も、御大抵ではあるまいと思えますと、くやしいのですけれども、また初めからこうなるように計らって上げたことを考えてみますれば、ひどく嬉しくもあるのです。(谷崎潤一郎『新々訳 源氏物語 巻九』中央公論社・104頁 傍点筆者、以下同じ)

○大將殿は、「こうまでして大人になっておしまいになられたのだから、いよいよ自分のほうには縁遠くなるのだろうか。また宮のお気持ちもほんとうに並々ではあるまい」と思うと、残念ではあるものの、また最初からの心づもりを顧みればまことにうれしくもある。(小学館『全集』(5)・463頁)

これらの現代語訳は、いずれも二つの「また」を同じ接続詞と解して現代語訳を試みている。しかし、それは適切ではないように思量される。次に『評釈』(玉上琢弥 角川書店)の現代語訳を引用する。

○大將殿は、こうしてすっかりおとなになってしまわれたので、ますます自分の方には縁がなくなることだろう。それに句宮の御愛情も並々ではあるまい、と思うのは残念だが、改めてははじめからの心づもりを考えると、とてもうれしくもあった。(第十一巻・259頁)

「それに」は、『日本 国語大辞典』の接続詞「②」の「その上。さらに。そればかりでなく。」の意。「改めて」は、同じく副詞「③」の「ほかに。さらに。他方。」の意に相当する訳語であり、『評釈』は、適切に文脈を捉えた現代語訳であるといわなければならない。小学館『完訳 日本の古典 22』は、『全集』(小学館)とほぼ同じであるが、今泉『現代語訳』(桜楓社)は「それにまた」、「しかしまた一方」(九・103頁)、新潮『集成』は「それに句宮のご愛情も」、「しかしまた、最初からの自分の心積りを」(七・245頁)と解している。「現代語訳」「集成」などは、副詞(傍線部②)の後の用例)の解釈に、やや難点が残るようにも思われるが、ほぼ妥当な現代語訳といえよう。

「索引」によれば、『大成』底本に用いられている「また」の語例は、『新釈』の『湖月抄』本より十例ほど少ない六

松風	絵合	閑屋	蓬生	漆標	明石	須磨	花散里	賢木	葵	花宴	紅葉賀	末摘花	若紫	夕顔	空蟬	帚木	桐壺	卷別
8	9	0	7	12	11	22	0	18	16	0	6	6	9	17	3	22	7	『新釈』本
8	8	0	6	13	11	21	0	18	15	0	4	9	10	16	2	22	7	『大成』本
4	6	0	5	12	10	20	0	14	4	0	4	6	4	13	1	12	4	副
4	2	0	1	1	1	1	0	4	11	0	0	3	6	3	1	10	3	接
0	+1		+1	-1	0	+1		0	+1		+2	-3	-1	+1	+1	0	0	増減数

鈴虫	横笛	柏木	若菜下	若菜上	藤裏葉	梅枝	真木柱	藤袴	行幸	野分	篝火	常夏	蛩	胡蝶	初音	玉鬘	少女	朝顔	薄雲
4	8	18	38	45	4	5	10	5	13	7	0	5	5	8	2	14	13	6	13
4	8	16	38	46	4	5	10	5	13	8	0	5	5	6	2	15	13	6	13
2	2	7	29	29	3	2	9	3	9	7	0	2	2	4	2	13	9	6	6
2	6	9	9	17	1	3	1	2	4	1	0	3	3	2	0	2	4	0	7
0	0	+2	0	-1	0	0	0	0	0	-1		0	0	+2	0	-1	0	0	0

夕霧	25	1	10	3	1	7	18	21	22
御法	1	1	8	3	1	7	17	21	22
幻	1	1	6	1	1	4	14	17	18
匂宮	0	2	2	2	0	3	3	4	4
紅梅	0	0	0	0	0	0	0	0	0
竹川	0	0	0	0	0	0	0	0	0
橋姫	+1	0	0	0	0	0	0	0	0
椎本	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総角	-1	0	+2	0	0	0	0	0	0

早蕨	9	51	11	21	22	16	5	639
宿木	11	48	12	20	20	16	4	629
東屋	8	33	6	15	15	11	1	437
浮舟	3	15	6	5	5	5	3	192
蜻蛉	0	0	-1	+1	+2	0	+1	+10
手習	0	0	0	0	0	0	0	0
夢浮橋	0	0	0	0	0	0	0	0
計	-2	+3	-1	+1	+2	0	+1	+10

百二十九例（以下指摘するように『大成』索引の誤脱を補正した結果による）である。既に指摘（『源氏物語』本文と享受）の方法」（『信州豊南女子短期大学紀要』第五号）したように、『湖月抄』の本文は、青表紙本群類ともいうべきものに属する混成、混態本文であるが、『首書源氏物語』の本文よりはやや系統論的に純粹であるとはいえ、不純な本文であることには変りがない。ただ、両本の語例の増減の様態、用例の頻度を考慮して、諸本の異同を捉えて、これを一覧にまとめて図表化して示すと次のようになる。増減数は『大成』底本を基準として「+」、「-」で示す。なお清水婦久子氏（『首書源氏物語 総合 松風』和泉書院）に『首書源氏物語』の本文について別の視点からの指摘が見られる。これらの資料、集計の結果から明らかにされる顕著な事実を、およそ次の二点である。

(1)、『大成』底本と『新釈』本文の『湖月抄』本とに用いられている「また」の語例は、両本が青表紙本系統とその群類本という性質上から、その増減数も「+3」〜「-3」以内にとどまる。「+3」は宿木の巻ほか五帖、「-3」は末摘

花の巻の一帖に過ぎない。

(2)、用例数が特に多く、群を抜いているのは宿木の巻であり、五十一例と四十八例に達する。増減数も「+3」でも高い。次いで若菜上の巻の四十五例と四十六例、若菜下の巻の三十八例と三十八例である。用例数が二十例を越え三十例未満でこれに次いでいるのは、帚木、須磨、夕霧、椎本、総角、浮舟、蜻蛉の巻の七帖である。二十例を越える宇治十帖の巻は五帖を占めている。

用例数の多い若菜上、宿木の両巻について、本文の異同を『大成』によって調査すると次のようになる。頁数、行数、諸本の表示などは『大成』によった。まず若菜上の巻について検討する。

- ① 一〇二六④ (副) ・又この宮の御もきの事をおほしいそかせ給・ナシ 阿。
- ② 一〇三一④ (副) ・いまは又その世にもねひまさりて・
- ③ 一〇三一⑥ (接) ・又うちとけてたはふれことをも・ナシ 阿。
- ④ 一〇三二③ (接) ・かつは又かたをひならむ事は・
- ⑤ 一〇三四① (副) ・又ま心におもひきこえ給へき人もなければ・
- ⑥ 一〇三四⑩ (接) ・又さしもふかゝらさりけるをも・補入 御。ナシ 別。
- ⑦ 一〇三五⑧ (副) ・又このついでにしかくなん・ナシ 阿。
- ⑧ 一〇三五⑫ (副) ・又かゝつらひおもふ人たちならひたることは・ナシ 国。阿。
- ⑨ 一〇三六⑧ (接) ・又たかききはいへとも・ナシ 阿。
- ⑩ 一〇三六⑩ (接) ・又さるへき人にたちをくれて・ナシ 阿。
- ⑪ 一〇三八⑩ (接) ・又大納言の朝臣・ナシ 阿。

- ⑫ 一〇三九⑥ (副) ・猶又このためにと思はてむ・ナシ 阿。
- ⑬ 一〇四一⑧ (副) ・又いくはくたちをくれたてまつるへしとてか。
- ⑭ 一〇四二⑪ (接) ・又かくとりわきてきゝをき・ナシ 阿。
- ⑮ 一〇四七③ (副) ・又思ゆつる人なきをは。
- ⑯ 一〇四八⑥ (接) ・又しかすつる中にも。
- ⑰ 一〇四八⑦ (副) ・又とりかへすへきにもあらぬ月日。
- ⑱ 一〇五五⑧ (副) ・又めつらしくきよらつくすへき事あらし・ナシ 別。
- ⑲ 一〇五八⑧ (副) ・又ならふ人なく。
- ⑳ 一〇五九⑤ (副) ・又人をならへてみるへきそ。
- ㉑ 一〇五九⑨ (接) ・またさりとて・ナシ 保。
- ㉒ 一〇六〇⑪ (接) ・又さりとて。
- ㉓ 一〇六四⑩ (副) ・又ちりはかりも心わくるかたなく。
- ㉔ 一〇六九② (副) ・又人にはもらし給はしと・落丁 平。
- ㉕ 一〇七四③ (副) ・又もらすへきならねと・ナシ 阿。
- ㉖ 一〇七九⑦ (副) ・又やすからすいふ人々あるに・ナシ 保。
- ㉗ 一〇八一⑧ (副) ・権中納言衛門督又おとらすたちつゝき給にける。
- ㉘ 一〇八二② (副) ・御あそひはしまりて又いとおもしろし。
- ㉙ 一〇八三⑫ (副) ・つたはりまいりたるも又あはれになん。

- ㉔ 一〇九二④ (副) ・又中宮の御方よりも。
- ㉕ 一〇九三⑪ (副) ・又人にはみえしらるへきにもあらずと。
- ㉖ 一〇九五③ (接) ・又内教の心をたつぬる中にも。
- ㉗ 一〇九五⑤ (接) ・またこの国のことにしつみ侍て。
- ㉘ 一〇九六④ (副) ・又たいめんは侍りなむ・ナシ・阿。
- ㉙ 一〇九六⑨ (副) ・又たいめんはありなむとのみ。
- ㉚ 一一〇〇② (副) ・又うちゑみていてやされはこそ・(ナシ 湖)
- ㉛ 一一〇三⑨ (接) ・又またしき願などのへりけるを・ナシ 保。
- ㉜ 一一〇四⑦ (副) ・またさるさまの契はことにこそ・ナシ 国。
- ㉝ 一一〇五⑥ (接) ・又われなからもさるましきふるまひを。
- ㉞ 一一〇五⑪ (副) ・又くしてたてまつるへき物侍り。
- ㉟ 一一〇五⑫ (副) ・いま又きこえしらせ侍らん・ナシ 阿。
- ㊱ 一一〇六⑫ (接) ・又とりたて、我うしろみに思ひ。
- ㊲ 一一〇七① (接) ・又あまりひたゝけてたのもしけなきも・補入、三。
- ㊳ 一一〇七⑪ (副) ・又とりもちてけちえんになとあらぬ御もてなし。
- ㊴ 一一一九① (副) ・又さばかりにてもほのかなる御ありさまをたにみむ。

『湖月抄』本は㉞の用例が「ナシ」となっているが、「索引」によれば㉔と㉕の間に「又更に心地ゆきげに滞りなかるべきに」『新釈』巻三 277頁)とあって、一例を加えるから用例数は四十五例となる。ところが『大成』索引の若菜上

卷末の接続詞の用語部分には不備がある。「一一〇七①」から、「一一六四①」にとんでしまっているからである。「一一六四①」は既に若菜下の巻である。その間に「一一〇九⑤」若菜下とあるべき部分を誤脱してしまっていると思量される。従って、「④一一〇九⑤(接)・又まことに心ちゆきけにと、こほりなかるへきに」を補入し、「④」を「⑤」にくりさげ、『大成』底本の用例数を四十六例に補訂すべきであると考える。

次に宿木の巻の用例について検討する。

- ① 一七〇三⑭ (副) ・よろしかるへき人又なかりけり・落丁 平。
- ② 一七〇六⑨ (副) ・又心をわけんこともかたけなめれ・ナシ 陽。
- ③ 一七〇八⑭ (副) ・又かやうにおほすことは・
- ④ 一七一四⑭ (副) ・それも又た、御心なれは・
- ⑤ 一七一八⑬ (副) ・またいか、おほしをきつらんと・
- ⑥ 一七一九⑦ (副) ・又かやうにもさふらはんとて・
- ⑦ 一七二一⑭ (副) ・よに又とまりてかた時ふへくも・
- ⑧ 一七二五② (副) ・又のへてこそはよからめ・ナシ 保。
- ⑨ 一七二五⑦ (副) ・なを又とくゆかしきかたの・ナシ 河。保、阿。
- ⑩ 一七二五⑫ (副) ・又もたのまれぬへけれとて・ナシ 保
- ⑪ 一七二七⑨ (接) ・またふたつとなくて・ナシ 阿。
- ⑫ 一七二八⑦ (接) ・又さるへき人めして・
- ⑬ 一七二九④ (接) ・又いとつみふかくもあなるものを・ナシ 保、阿。

- ⑭ 一七二九⑩ (副) ・又さるへき人もおはせず・
- ⑮ 一七三〇① (接) ・またちいさきたいふたつ・ナシ 保。
- ⑯ 一七三三⑭ (接) ・又あまりおほつかなくはあらず・
- ⑰ 一七三四⑦ (副) ・又えひきよきてもわたり給はず・補入 三。
- ⑱ 一七三七⑦ (接) ・またなくさめもかたぐにし・
- ⑲ 一七三八④ (副) ・又よろしく思給へられん程に・
- ⑳ 一七三九⑬ (接) ・又けにねはなかれけり・ナシ 陽。
- ㉑ 一七四〇⑪ (接) ・又たちまちの我心のみたれにまかせて・
- ㉒ 一七四二⑤ (副) ・又おもひます人なき心のとまりにて・
- ㉓ 一七四四⑩ (接) ・又御心をき給はかりの程やはへぬる・
- ㉔ 一七四四⑬ (副) ・また人になれける袖のうつりかを・
- ㉕ 一七四九⑧ (副) ・いまそ又れいのめやすきさまなる・
- ㉖ 一七五一⑦ (副) ・又いかゝとつゝましければ・ナシ 保、陽。
- ㉗ 一七五二② (副) ・又よろしきおりありなとこそ・
- ㉘ 一七五四⑥ (副) ・又うたてみたらしかはちかき心地する・
- ㉙ 一七五五③ (接) ・又うちつけにさしもなにかはむつひ思はんと・
- ㉚ 一七五五⑫ (副) ・又あいなきことをさへうちそへて・
- ㉛ 一七五六③ (接) ・又あまりいはゝ心をとりもしぬへき事に・

- ⑳ 一七五九① (副) ・又なき給ぬ。
- ㉑ 一七六〇③ (接) ・又後の世のすゝめともなるへきことに。
- ㉒ 一七六一⑧ (副) ・又とも御覧しているゝことも。
- ㉓ 一七六二⑭ (副) ・又ひたちになりてくたりはへりにけるか。
- ㉔ 一七六五⑨ (副) ・又いはほのなかもとめんよりは・ナシ 保。
- ㉕ 一七六八① (副) ・又かへりなまほしけにおほして。
- ㉖ 一七六八⑫ (接) ・又さはかりやむことなけなる御さまにて。
- ㉗ 一七七二⑦ (接) ・又宮の御心さしも。
- ㉘ 一七七二⑦ (副) ・又はしめよりの心をきてを思には・ナシ 阿。うちかへし 陽。
- ㉙ 一七七七⑬ (副) ・又はいつかははえくしきついでの。
- ㉚ 一七七九④ (副) ・またあらしかし。
- ㉛ 一七八〇⑭ (副) ・又御むかへのいたし車。
- ㉜ 一七八二④ (副) ・又人やとり給へときたおもてになん・なん 陽。
- ㉝ 一七八三① (接) ・又をとなひたる人いまひとりおりて・ナシ 桃。
- ㉞ 一七八三④ (副) ・又いつこのあらはなるへきそと・ナシ 桃。
- ㉟ 一七八四⑫ (副) ・又ゆかしくなりつゝ・いま 横。
- ㊱ 一七八七⑥ (副) ・またこの月にもまうてゝ・ナシ 阿。

『湖月抄』本は㉙と㉚の間に、「又かたはにも聞くまじきさまに」(『新釈』卷五 263頁)とあり一例を加える。「又」

の異文をもつのは、「池・肖・三・桃。」の青表紙本、別本の四本に亘っている。

『新釈』索引は『大成』一七六五⑬「またほにいてさしたる」の「たま」を用例にあげているが、「まだ」とすべきで誤りである。

『湖月抄』本は⑬と⑭の間、「萬代を」と「君がため」の歌の間に「又誰とか」(『新釈』巻五318頁)とあり、更に一例を加える。これと同じ異文をもつのは河内本、別本の「宮・保・国・阿・桃」など十一本に亘っている。青表紙本と別本の陽明文庫本など六本がこの異文をもたないことになる。

これらの記述を要約すると、宿木の巻に見られる「また」の用例は、『湖月抄』本では五十一例、『大成』底本では四十八例である。増減数は「+3」となっている。

『源氏物語』一帖という視点から、一帖の物語りの量的な問題を考慮しないで、「また」の用例を調査すると、四十例を超えるのは宿木、若菜上の両巻だけであり、以下、若菜下の巻の三十八例がそれに次ぎ、夕霧の巻の二十五例の順となっている。若菜上・宿木の巻について、諸本による本文の異同を一覧にまとめると次のようになる。※印を付したものは、異文が長文化していて、単なる語句の異同にとどまるものでないことを示す。番号は資料ナンバーである。

○若菜上巻

- (1) ナシ・阿里莫本(別本)・①・③・⑦・⑨・⑩・⑪・⑫[※]・⑭[※]・⑮・⑳・㉑・㉒
- (2) ナシ・保坂本(別本)・㉓・㉔・㉕・㉖
- (3) ナシ・阿里莫本、保坂本(別本)・⑥・⑬
- (4) ナシ・国冬本(青表紙本)、阿里莫本(別本)・⑧
- (5) ナシ・国冬本(青表紙本)・㉗

○宿木巻

- (1) ナシ・保坂本(別本)・⑧・⑩[※]・⑮・⑳[※]
(2) ナシ・阿里莫本(別本)・⑪[※]・⑭[※]・⑰[※]・⑱[※]・㉑[※]・㉒[※]・㉓[※]・㉔[※]・㉕[※]・㉖[※]・㉗[※]・㉘[※]・㉙[※]・㉚[※]・㉛[※]・㉜[※]・㉝[※]・㉞[※]・㉟[※]・㊱[※]・㊲[※]・㊳[※]・㊴[※]・㊵[※]・㊶[※]・㊷[※]・㊸[※]・㊹[※]・㊺[※]・㊻[※]・㊼[※]・㊽[※]・㊾[※]・㊿[※]
(3) ナシ・陽明文庫本(別本)・②・⑳・㉔
(4) ナシ・桃園文庫本(別本)・④⑤・④⑥
(5) ナシ・河内本・保坂本、阿里莫本(別本)・⑨
(6) ナシ・保坂本、阿里莫本(別本)・⑬
(7) ナシ[※]・保坂本、陽明文庫本(別本)・⑳[※]
(8) ナシ・横山本(青表紙本)・㉟

以上の一覧を諸本ごとに集計し、全用例数に対する百分率を示すと次頁表のようになる。

用例数が四十例を超える若菜上、宿木の両巻を任意に抽出し調査・検討を加えた以上の資料から明らかにされる点は、ほぼ次のように四点に要約することができる。

- (1)・副詞、接続詞の「また」の用例数は、「大成」底本の青表紙本では六百二十九例、同一群類に属する「湖月抄」本では六百三十九例で、増減数は「湖月抄」本では十例多く、百分率では〇・一六%とその異文数はきわめて少ない。
(2)・青表紙本、河内本に見られる異文数はきわめて少なく、百分率で〇・四三から〇・二%にとどまる。

(3)・これに対して、一部の別本に見られる異文数は比較的顕著な減少傾向を示している。阿里莫本、保坂本、陽明文庫本などは百分率で一〇%を超え、特に若菜上巻で阿里莫本は三〇・四%もその語例が減少している。そこには、異文の長文化から生じたと考えられるものも若菜上巻で二例、宿木の巻で三例ほど見られる。しかし、それを差し引

卷名		諸本		異文数		百分率	
若菜上巻		阿里莫本(別)		14		30.4	
宿木巻		保坂本(別)		5		10.9	
		国冬本(青)		2		0.43	
		保坂本(別)		7		14.3	
		阿里莫本(別)		5		10.2	
		陽明文庫本(別)		5		10.2	
		桃園文庫本(別)		2		0.41	
		河内本		1		0.2	
横山本(青)		1		0.2			

いてもこの傾向は顕著である。『大成』底本に対する『湖月抄』本の〇・一六%の増加率に対し、この三本の一〇%を超え、更に三〇%を超える場合さえ見られる減少傾向は、三本の本文的性質を明らかにする上で、きわめて示唆的な事実をあらわすものである。

(4) 本文系統論的には、河内本は別本との混態によってあらわれている。青表紙本の一部にも別本との混態によると見られるものが存するほか、独自異文としてあらわれていると認められるものが存在する。しかし、これらの異文はきわめて少なく、一例から二例に過ぎない。

小学館『全集』(5) 四六二頁、頭注「二」に「……また……また……」の文脈で、薫の複雑に揺れ動く心情を表現。」という注記に準ずるかと思われる用例を若菜上、宿木の両巻から指摘すると次のような語例が見られる。

○若菜上巻

- (1)、②・③・朱雀院の詞。源氏への賛美の心情を描く部分。
- (2)、⑨・⑩・朱雀院の詞。女三宮の処遇をめぐる苦悩を描く部分。
- (3)、⑪・⑫・朱雀院の詞。(2)と同じ。いずれと悩む心情を描く部分。
- (4)、⑬・⑭・源氏の詞。朱雀院の意向を受ける源氏の心情を描く部分。
- (5)、⑯・⑰・朱雀院の詞。(2)、(3)と同じ。源氏に心情を訴える部分。
- (6)、⑱・⑳・紫上が今まで「並ぶ人なくならひ給ひ」ていた、それなのに源氏はまた女三宮を迎え入れたとする。同類の語句を対応させて、二人の心情の相剋を待偶的に描く部分。

(7)、㉑・㉒・源氏の紫上への言いわけの詞。同じ語句を重ねて女三宮、紫上に対する心情を相対的に描く部分。

(8)、㉓・㉔・明石入道の消息文。同類の語句を重ねて、確信的に強く心情を述べる部分。

(9)、㉕・㉖・源氏の詞。明石入道の願文に添えて女御に渡さなければならぬ源氏の願文があり、その趣旨をお話し申しあげようというところ。女御の心情を思量しながら、たゆまない屈折する源氏の心情を描く部分。

(10)、㉗・㉘・源氏の詞。あれこれと考えあぐねて理想の妻のありようを思量する部分。

『大成』底本の「また」の用例数四十六例中、二十例が、このようになり明確な用語意識に操られながら用いられている。特に(1)から(5)まで、(6)、(7)には、明確な同質の用語意識が群をなして存在する。物語の作者は、こういう点で非常にしたたかな表現技法に習熟していた作家であったと考えなければならない。次に宿木の巻について検討する。

○宿木巻

(1) ⑨・⑩・⑪は中君を愛しながらも一方では又早く六君に逢いたいと乱れる句宮の姿を捉える。⑩は中君の句宮への詞。なおも性懲りもなくやはり句宮を頼りにするという。句宮の定めがたい心情、それを頼りにする中君、二人の心情の相剋を対偶的に見事に描く部分。

(2) ⑬、⑭・句宮の御子を懐妊しながら死を思い、その罪障の深さに悩む中君の心情、句宮と六君の三日の祝いに夕霧から誘われて同車して赴く薫。夕霧一門の席に光彩を添えるべき人は薫以外にいない。やはり相剋する心情の境界を対偶的に描く部分。

(3) ⑯・⑰・中君と六君とを句宮が対比して思い較べたり、行動したりするところ。二人の女性の人生の明闇を、対偶的に巧みに描き分ける部分。

このような(1)、(2)、(3)の用法は、若菜上の巻ではあまり見られなかった用法である。文脈のなかで、「また」が接続詞なり、副詞なりの語法や語意を表わしながら、和歌の贈答歌における同語や同類の語が果しているような役割を「文」のなかで果しているような語例である。和歌のなかでみがきぬかれてきた「ことば」に対する鋭い感覚が、このような修辞や技法となって『源氏物語』には存在しているのではないだろうか。そして、こうした語句の用法は、さらに語法の面にもおよんでいのように思われる。宿木の巻に用いられている強調逆接法の用例はきわめて少ない。ところが、

かくて三年になりぬれど、一とこの御心ざしこそおろかならね、おほかたの世にはものしくももてなしきこえたまはざりつるを、このをりぞ、いづこにもいづこにも聞こしめしおどろきて、御とぶらひども聞こえたまひける。

(小学館『全集』(5) 458頁)

中納言の君は、宮の思しさわぐに劣らず、いかにせんと嘆きて、心苦しくうしろめたく思さるれど、限りある御と

ぶらひばかりこそあれ、あまりもえ参^までたまはで、忍びてぞ御祈禱などもせさせたまひける。(同、458頁)

という傍線部に見られるような強調逆接法が、連続して用いられている表現意識は何であったのか、物語の享受という論点からは、そういう問題を問いつめていく必要もある。そこにみられるように、匂宮と薰君の中君に対する処遇、愛の形を、これほどまでに対照的に、しかも残酷なまでに厳しい対偶意識をもって語る有効な表現があるだろうか。二つの強調逆接法は、作者のそういう表現意識を明確に表現し、それを、読者に読みとらせていくためにとられた技法であったと理解しなければならぬのであろう。それは、和歌の表現技法から学び得たもの、歌物語の伝統、歴史の深みの中から育まれてきたものであったと同時に、「物語」が、作者と読者とが同時にさし向って享受するというような、一つの「座」ともいうべきものなかで享受されてきた、そうした享受形態と深く関わるものであったと考えなければならぬように思う。

こういう視点から捉え直してみなければならぬ語に、やはり「掲焉^{掲焉}なり」という語がある。「大成」、「新釈」の「索引」によれば、この語例は『源氏物語』に七例見える。「新釈」本によって用例を示す。

(1)〇かしがましうののしりをる顔どもも、夜に入りては、なか／＼今すこしけちえんなる火影に、さるがうがましくわびしげに人わろげなるなど、さまざまに、げにいとなべてならず、さまざまなるわざなりけり。(少・303頁)

(2)〇おのづから思ひ合はする世もこそあれ、掲焉^{掲焉}にはあらでこそ言ひまぎらはさめ。見所ある文書きかな」など、とみにもうち置き給はず。(胡・32頁)

(3)〇俄に斯く掲焉^{掲焉}に光れるに、あさましくて、扇をさし隠し給へるかたはら目、いとをかしげなり。(螢・49頁)

(4)〇白き赤きなど、掲焉^{掲焉}なる枚^枚は、筆取りなほし、用意し給へるさへ、見知らむ人は、げにめでぬべき御有様なり。

(梅・234頁)

(5)〇只この御有様を、打添ひても見え奉らぬ覺束なさに、譲り聞えらるるなめり。それも又取持ちて掲焉になどあらぬ御もてなしどもに、よろづの事なために目やすくなれば、いとなむ思ひなく嬉しき。(葉上・375頁)

(6)〇下仕どもの、いたうなえばみたりつる姿どもなど、白き袴などにて、掲焉ならぬぞなか／＼めやすかりける。誰かは、何事をも後見聞こゆる人のあらむ。宮はおろかならぬ御志の程にて、よろづをいかでと思しおきてたれど、こまかなるうち／＼の事までは、いかがは思し寄らむ。(宿・278頁)

(7)〇夜居の僧の座に入れ奉るを、女君、誠に心地もいと苦しけれど、人のかう言ふに、うたて掲焉ならむも、又いかかとつつましければ、物憂ながら、すこしみざり出でて、たいめし給へり。(宿・282頁)

「掲焉」について大修館『大漢和辞典』(諸橋轍次)は、「張衡 西京賦」を用例にあげ「〇高くあがるさま。」とし、「注」に「善曰、説文曰、掲、高举也」とする。いま「掲」を略字「掲」に改めた。以下同じ。次に「続日本後記、七」を用例にあげ「〇いちじるしく明かなさま。」とする。小学館『全集』(3) 蜚巻の語例の頭注に「元来は高くあがるさまをいう漢語。転じて著しく目につくさま。」(192頁)とあるのは、大修館『大漢和』などの記述をふまえた注記と思量される。小学館『日本 国語大辞典』第七巻は、「①著しいさま。きわだっているさま。目だつさま。けつえん。」②高くあがるさま。高くそびえるさま。けつえん。」とする。大修館『大漢和』は「ケツエン」「ケチエン」のよみを並記する。これら『源氏』の七例は、『新釈』など一部の注釈書によって多少の異同は見られるもの、小学館『大辞典』の「①」の語意を表わすものと考えるべきである。ところが、『角川 古語大辞典』第二巻は見出し語「けちえん(掲焉)」、「名・形動ナリ」の後に、

「けち」は「掲」の漢音、高く掲げる意。「焉」は状態を表す助字。著しく際立っているさま。目立つさま。「掲焉ケチエン、イチシルシ」(黒川本字類抄)

と記述し、『紫式部日記』と『沙石・二』の用例をあげている。『源氏』の全用例はここでも『角川古語大辞典』の記述に尽くされているように思われる。

用例(1)は、「一条東院で夕霧の字をつける儀式を行う」条。学問尊重という源氏の肝いりで、ところを得た儒者達は得意顔ではあるが、博士達の道化ぶりが、かえってひときわ照らし出されるというアイロニカルな場面。それは「けちえんなる火影」に、「けちえん」にあぶり出される「さまさまに、げにいとなべてならず、さま異なるわざ」であった。「けちえんなり」という、漢語をもとにつくられた固苦しい形容動詞は、時流にとり残された博士達そのものの姿を形象する語であった。と同時に、そうした表現の裏には、自らの階層を逆に照射し、体制的な社会の矛盾に迫ろうとする作者の、ある痛烈な批評の精神が秘められていたことを、読みとっていく必要があるはしないか。少なくとも、そこには、一つのアイロニカルな眼が、憂いかがやいている。用例(2)は、「源氏、人々の懸想文を見て玉鬘に語る」条。柏木は、玉鬘が実姉であることを自然に思い当る時もあるだろうが、それは困ることにもなるのだ。「だが、」いまはそのことをはっきりと言わないで、うまく取り繕っておこう。△取り繕うことにしたい。▽強調逆接法で「こそあれ、」とすれば、「だが」となるが、前後に短いセンテンスが来ているし、「こそ——已然形」の係り結びが重ねて用いられ、強調されているから、強いてそう解する必要もないだろう。だが、「もこそ」の語法は明確に捉えていく必要がある。小学館『全集』は、「見どころある文書きかな」(172頁)の頭注で、「ここで源氏が柏木の筆跡を見覚えしたのは、若菜下巻で源氏が柏木の文を発見する条とかかわるか。」とする。「もこそ」、「掲焉に」の語は『全集』の注記に微妙に重ねられていく表現意識を持っている。直前に「さる中にもいと静まりたる人なり。」とある柏木に対する批評が、実は逆接的に、アイロニカルに展開していくことを、「掲焉に」などの語群のなかに、伏線的、暗示的に示していると解してこそ、ぼそつ、ぼそつと短く切れ、しかも異様に屈折しながら連続する文脈の表現意識を、理解していくことができるはずである。

『源氏物語』は、そうした用語意識によって操られる語彙を、謎のように散りばめ、組み込んでいる文学だと考えなければならぬ。

用例(3)は、「源氏、螢火により宮に玉鬘の姿を見せる」条。兵部卿宮がきつとひどく色好みでいらっしやるに違いない、そんな宮の心を悩ましてやろうと、源氏は螢をつつみ隠して趣向をめぐらしふるまいさなる。草子地で「まことのわが姫君をば、かくしももて騒ぎたまはじ。うたてある御心なりけり」(『全集』(3) 192頁)と源氏を批判する。頭注に、

読者の反応を見越して先手をうち、いわば物語の趣向の實在感を効果的ならしめる手法。とある。源氏が親であれば、「男の好色」心をそめる材料に仕立てて騒ぐことは「あるまいに」と批判を加えている。「物語の趣向の實在感」という捉え方もできようが、「かく掲焉に」螢に照らし出されることは、玉鬘にとって「あさましく、扇をさし隠」すべき迷惑なこと、困ることだった。そこには、「もこそ」と同類な、それと対応する表現意識が見られ、「掲焉に」の語を伴っている。やはり一つの、アイロニカルな眼が、用例(1)、(2)と同じようにそのなかにかがやいている。同質の表現意識を読みとっていく必要があるのである。『角川 古語大辞典』が記述するように、「著しく際立っているさま。目立つさま」という語意は、「もののはれ」や「をかし」の世界が、対偶美、調和美をその根底に志向する。「影」の美意識をその背後にもつものであったとすれば、ややほみ出し、傾斜する世界と深く関わる意味を表わす。既に指摘してきたことのほかに、一つには、そうした語意が、アイロニカルな表現意識に結びついていく要素を持っていた、というように理解すべきかも知れないのである。

用例(4)は、「源氏草子を書く 兵部卿宮草子を持参する」条。明石の姫君入内の調度が整えられていくなかで、草子も数多く集められた。前後の部分を小学館『全集』の現代語訳を引用する。

御簾をずっと全部あげて、脇息の上に草子をのせて、端近い所にうちくつろいで、筆の尻をくわえて、あれこれと

思案をめぐらしていらっしやる大臣のお姿は、見あきることもないほどに結構である。白いのとか赤いのか、はつきり墨色が目につく紙面は、筆をとり直し、注意してお書きになるご様子までが、見る目のある者なら、なるほど感に堪えられそうもないお姿である。

兵部卿宮がお越しになられた、と申しあげると、大臣は驚いて御直衣をお召しになり、……………(3) 410頁)

この傍線部(4)の用例には(1)、(2)、(3)に見られるような用語意識は見られない。一群の用語意識によって操られてきた語彙が、別の視点から、それまでの用例をふまえながら、転換がはかられて用いられていく。用例(4)は、(2)を承ける。源氏は、「もの好みする若き人々試みん」と「宰相中将、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中将などに」、「葦手歌絵を、思ひ思ひに書け」(『全集』409頁)と依頼する。柏木は、草子執筆にも参加してその手並みを見せている。これは若菜下巻の件の条と深く関わる。これに続くのが「掲焉なる枚」であり、この直後に「兵部卿宮渡りたまふ」とある。これが、用例(3)を承けるものであることは説明を要しない。この梅枝の巻の「掲焉なる」の用語が、胡蝶、蛍の両巻を構想のうちに置いて、意識的、意図的に操られたものであったことを否定することはできないように思う。物語構想上の対偶、対応の意識が、実に見事に表現されていると見なければならぬ。

用例(5)は、「源氏紫の上を称揚 明石の君わが身を思ふ」条。岩波『大系』頭注に「(明石女御を)独占して「目立つ程、頭著に親ぶったり」などしない御振舞などのために、」(3) 300頁)とあるのに従うべきで、小学館『全集』などの現代語訳も同様。ただ頭注に「明石の女御が卑下して、実母顔に振舞わないのがうれしい、の意。」(『全集』(4) 124頁)とあるのは、主語を誤っているので訂正する必要がある。明石の御方が、「目立つ程、頭著に親ぶったり」などしないことが、源氏にはうれしいというので、ここでも「掲焉に」あることは、「もこそ」「もぞ」の表現意識を伴うことであった。厳しい自己抑制を強いる明石の御方と、それを安易にうれしがり、喜ぶ源氏との生き方を物語の作者はさめた心で

対比させ、アイロニカルな眼をかがやかせている、そんな風に読んでいかなければならないところである。用例(5)に続く源氏の詞の続きとそれを結ぶ部分を引用する。

はかなきことにても、もの心得ずひがひがしき人は、たちまじらふにつけて、人のためさへからきことありかし。さなほしどころなく誰もしたまふめれば、心やすくなむ」とのたまふにつけても、さりや、よくこそ卑下しにけれなど思ひつづけたまふ。対へ渡りたまひぬ。(『全集』(4) 124頁)

小学館『全集』頭注に「卑下しつづ生きてきた今までの態度が正しかったことを確認し」「わが身の悲しみをあらためてかみしめた」と注記する。「さりや」「こそ」「など」の語には、自からに厳しい自己抑制を強い、苦悩にたえ卑下して生きぬいてきた明石の御方の心情がにじみ出ている。だが、源氏が紫上のもとにお越しになられたという最後の短いセンテンスは、ある決定的な、絶対的な響きを伝えてくる。明石の御方にとってこれほど非情で、残酷な響きを伝える絶望的な言い方がほかにあるだろうか。六条院の秩序の世界が顔をのぞかせてもいる。「幸人」への道は遠く遙かな世界でもあった。物語は「夕霧、女三の宮と紫の上とを比較する」、「柏木女三の宮を諦めず、源氏の出家を待つ」条から、六条院の蹴鞠の場面へと展開する。柏木、女三の宮事件へと大きくうねりながら、六条院の秩序の崩壊へと傾斜していく。そこには、ただ切り込んでくるだけではなく、かえす刀で鋭く切りかえしていく、作者の激しいアイロニカルな発想が、謎のように深く埋め込まれている。物語の構想、構成をふまえながら「掲焉」なる語を見事に操っていく、したたかな物語作者の用語意識を、注意深く読みとっていくところに、物語享受のたのしさがあるのである。

用例(6)は、「薫、執心を抑えて、中君をよく後見する」条。ここもまた、かなり深い意識のなかから、捉え直さなければならぬ用語意識を持っているところである。薫が中君の夫であるならば、衣配りも意味がある。いまや、匂宮の子の母になろうとする中君である。少し長くなるが、用例(6)の引用本文に続く部分である。

誰かは、何ごとをも後見かしづききこゆる人のあらむ。宮は、おろかならぬ御心ざしのほどにて、よろづをいかで
と思しおきてたれど、こまかなる内々のことまではいかゞは思し寄らむ。限りもなく人へのみかしづかれてならはせ
たまへれば、世の中うちあはずさびしきこと、いかなるものとも知りたまはぬ、ことはりなり。艶に、そぞろ寒く花
の露をもてあそびて世は過ぐすべきものと思したるほどよりは、思す人のためなれば、おのづから、をりふしにつけ
つつ、まめやかなる事までもあつかひ知らせたまふこそ、あり難くめづらかなる事なめれば、「いでや」など、譏ら
はしげに聞ゆる御乳母などもありけり。(『全集』(5) 429頁)

薫は、あり合わせの物ながら中君のお召料に歌を添え、近く仕える下人の料などにも「掲焉ならぬ」ように気配りする。
しかし、人々にかしづかれた位高い匂宮は、中君への愛情だけは深くいだきながら、そうした内々の生活面でのお世話
までは思いつかない。時の流れに取り残され、わびしい生活など経験したことのない匂宮にとって、それは「ことはり
なり。」と草子地で評される。だが、匂宮として生活面で殊遇を与えていないわけではない。匂宮の乳母などは、それを
非難めいてあげつらう、という。このように文脈をたどつてくると、薫が「中君をよく後見する」という小見出しのタ
イトルの意味がはつきりとしてくるように思われる。だが、薫は中君に対する誠実な、奇特な後見人であるとともに、
また、中君への愛の執心に悩む懸想人でもあった。「何かは、ことごとしくしたて顔ならむも、なかなかおぼえなく見
とがむる人やあらん、」(同 430頁)と考えながらも、今度はまた、新しくつくろいたててお召料としてさしあげた、と
いう。件の条の最後の文は、次のようになってる。

この君しもぞ、宮に劣りきこえたまはず、さまことにかしづきたてられて、あてなる心ばへはこよなければ、故親
王の御山住みを見そめたまひしよりぞ、さびしき所のあはれさはさまことなりけり、と心苦しう思されて、なべての
世をも思ひめぐらし、深き情をもらひたまひにける。いとほしの人ならはしやとぞ。(同 431頁)

文末の草子地について、小学館『全集』頭注に「薫の八の宮家との関係を評した草子地。知らずともすまされる身分であるのに、他人の落魄の境遇に深く関わりあってしまった、の意持をこめていう。「いとほしきとは、薫君をいたはりていふ也」(玉の小櫛)(430頁)、「匂宮の妻として中の君が体面を保っていくのには、薫の援助が必要なのである。薫の申しぶんない思いやりの由来を、語り手は匂宮の態度と比較して説く。説明を要するほどの奇特さゆえである。この後見ぶりに中の君を諦めきれない思いがどこまでもまつわりついているだけに。」(431頁)と注記する。『岷江入楚』(桜楓社「古注集成」)に引く諸注の注記は、

花、故宮にならばされ給て人のたえ／＼しき事をもしり給也

弄 宇治の宮よりさびしき躰を見習給てをしはかり給也人のためいとおしと也

秘 草子地也よく思ひしらせ給事と也(384頁)

『孟津抄』(桜楓社「古注集成」)は「よく物を思ひやる御心と人かいふと草子地也」(185頁)とし、『弄花抄』を引く。玉上『評釈』は「お気の毒な八宮の御感化とのこと」「八の宮の宇治のわび住まいを御覧になってからというもの、時代に捨てられた人々のあわれさを身にしみて、感じているので、同情もいっそう深いのであった。」(199頁)とする。

これらの注記には、古注以来一貫する薫像が捉えられている。小学館『全集』の頭注、鑑賞のなかには、何か新しい見解を揺曳しているようにも見られる。だが、『玉の小櫛』の引用は、やはり、そう解すべきものでもないようである。「いとほし」は、小学館『日本 国語大辞典』に、「(動詞)「いとふ」から派生した形容詞) 苦痛や苦惱で心身を悩ますさまを表わす。自分に関して、苦しい、つらい意となり、他人に対しては、かわいそうだ、気の毒だ、いとしい、という意になる。」(262頁)とし、「②かわいそうだ。ふびんだ。気の毒だ。」「③かわいらしい。いじらしい。」と注記する。『角川 古語大辞典』は「いたはし」の転とする説もある」と付記し、「ほぼ「気の毒だ」にあたるが、今日いう

ところよりも、いっそう痛切である。」とし、小学館『大辞典』の「③」の意味を「②」より転じたものとする。辞書的な語意は、古注以来の注記に同じであることがわかる。しかし、この草子地の「いとほし」には、具体的にはもっと他の用語意識が存在するように思量される。『大成』索引によれば、『源氏』に用いられている語幹の用例は六例であるが、竹河の巻の語例に注意すべきである。小学館『全集』本を引用する。「四月一日少将惜春の歌を贈る 女房の返し」の条。

御前にて、これかれ上臈だつ人々、この御懸想人のさまさまにいとほしげなるを聞こえ知らする中に、中将のおもと、「生死を、と言ひしさまの、言にのみはあらず心苦しげなりし」など聞ゆれば、尚侍の君もいとほしと聞きたまふ。大臣北の方の思すところにより、せめて人の御恨み深くはと、とりかへありて思すこの御参りを、妨げやうに思ふらんはしもめざましきこと、限りなきにても、ただ人にはかけてあるまじきものに故殿の思しおきてたりしものを、院に参りたまはむだに、行く末のはえはえしからぬを思したるをりしも、この御文とり入れてあはれがる。御返し、
今日ぞ知る空をながむる気色にて花に心をうつしけりと

女房「あないとほし。戯れにのみもとりなすかな」など言へど、うるさがりて書きかへず」(81頁)

大君への懸想人蔵人少将のむくわれぬ思いを、上臈だつ女房、玉鬘、女房が、それぞれに「いとほし」と思うというのだが、「戯れにのみとりなすかな」、「うるさがりて書きかへず」という文末には、やはり少将に対する戯画化が見られる。「いとほし」という同形の語を重ねていく。そういう強調的な表現のなかに、戯画化への意識を高揚させていく。それは、この物語に続く「大君参院 蔵人少将と歌を贈答する」の条にある大君の歌、

あはれてふ常ならぬ世のひと言もいかなる人にかくるものぞは

ゆゆしき方にてなん、ほのかに思ひ知りたる」(84頁)

とある小学館『全集』頭注に、「やや揶揄の気味がある」という注記を重ねていくと理解できる。用例(6)、宿木の巻に続く草子地「いとほしの人ならばしやとぞ。」に、これと同じ用語意識が見られると解されないだろうか。そして、そういう意識をたどっていくと、「掲焉ならぬぞなか／＼めやすかりける。」という、「掲焉なり」の語に、やはり迷惑とか、アイロニカルな用語意識が随伴していたと考えなければならぬように思う。それは王朝の「影」の美意識と深く関わるものであったと考えられる。薫の「掲焉ならぬ」もてなしが、かえってめやすかった、でもそれは、誠意をこめた後見とともに、懸想人「薫」をアイロニカルに見つめる物語作者の、非情とも見られるクールなまなざしがかがやいていた。そうした用語意識に深く関わるのが、用例(7)である。中君の心情を説明する必要はもはやあるまい。掲焉なるの振舞いが、「又いかがとつつまし」いのである。そして、この意識は用例(6)の薫の振舞いに対応する。薫の「もの」と中君の「こころ」、相剋する二人の心情の世界を、「掲焉」なる語を通して、対偶的に、対応、照応するものとして見事に描き尽そうとしたのではなかっただろうか。作者の心理の深層には、そういうしたたかな用語意識が存在していたように思う。

III

「心ときめき」、「顕証」、「また」、「掲焉」などの用例や「こそ」→「已然形」の強調逆接法の語法を通して、その後には潜む用語意識、用法上の意識などを辿り、物語享受の問題に検討を加えてきた。ここでは、そのような意識が、宿木の巻の巻論と如何に関わるかという論点から問題を捉え直してみたい。

宿木の巻、巻名の由来は「昔を偲ぶ薫と弁の尼との唱和」の歌による。

木枯のたへがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を踏み分けける跡も見えぬを見わたして、

とみにもえ出でたまはず。いとけしきある深山木にやどりたる鶯の色ぞまだ残りたる。「こだに」などすこし引きとらせたまひて、宮へと思しくて、持たせたまふ。

やどり木と思ひいでは木のものとの旅寝もいかにさびしからましと独りごちたまふを聞きて、尼君、

荒れはつる朽木のもとをやどり木と思ひおきけるほどの悲しき

あくまで古めきたれど、ゆゑなくはあらぬをぞいささかの慰めには思しける。(『全集』 451頁)

巻論の始発に、傍線部「いとけしきある深山木にやどりたる鶯の色ぞまだ残りたる。」という、情景描写と鶯の心理描写、それが渾然となっているこの部分をどう解釈していくかということ、きわめて重要な鍵になっているように思う。「木枯のたへがたきまで」の注記に、「おもしろき躰也」(『孟津抄』下巻 桜楓社 192頁)、「秘 景気たくひなし」(『岷江入楚』第四巻 桜楓社 400頁)などがある。延宝木版本『湖月抄』傍注に引く『細流抄』の注記にも、「景気たくひなし」(七二才)とある。これに続く傍線部「いとけしきある深山木」は、従来「たいそう趣のある深山木」(谷崎「新々訳」巻九 95頁)、「よい形をした常磐木」(与謝野 河出書房 下巻 242頁)、「とてもおもしろい深山木」(玉上「評釈」十一巻 236頁)、「まことに風趣のある深山木」(小学館『全集』(5) 452頁)という解釈がなされている。小学館『完訳日本の古典22』、新潮『集成七』などもこれと同じ。しかし、一方では、「一風変わった朽木」(吉沢『新釈』巻五 298頁)、「全く一ふし変わった様子である深山木(老木)」(山岸 岩波『大系』五 101頁)などという解釈もなされてきた。山岸徳平氏は、『大系』補注で、

この「気色ある」は、「普通と違っている」「一ふし変わった所のある」「異様な」などの意。「趣のある」意ではない。「夕顔巻」「気色ある鳥の、空声に鳴きたるも、鼻はこれにやとおぼゆ」(白一五一頁)などの「気色ある」と同

意。(448頁)

と指摘されている。小学館『日本 国語大辞典』は「けしき 有り」に、「①なにかいっふう変った趣がある。興趣をさそうものがある」とし、『源氏』胡蝶などの用例をあげる。さらに、「②あやしげだ。ぶきみな様子だ」とし、『源氏』夕顔などの用例をあげている。『角川 古語大辞典』は、「けしき」に八種類の意味分類をする。「⑥」に「通常と変わった様子。「けしきあり」の形で用いるのが普通。」とし、「④物語の起るきざし。兆候。」「⑤いっふう変った趣。」「⑦あやしげな様子。不気味な感じのするさま。」とする。『角川 古語大辞典』「⑥」の注記は、小学館『日本 国語大辞典』の「けしき 有り」に必ずしも対応するものではなく、その一部分と解すべきであろう。以下『源氏』の用例を通して検討を加える。『大成』索引によれば、ラ変動詞「けしきあり」の用例は、連用形四例、連体形十三例である。小学館『全集』本により、用例を示し、『大成』により、本文の異同をその語に限って調査する。

(1)〇「色も、はた、なつかしきゆかりにしつべし」とて、うちほほ笑みたまへる、気色ありて、にほひきよげなり。
(裏・423)

(2)〇「この世に染みたるほどの濁り深きにやあらむ、賢き方こそあれ、いと限りありつつ及ばざりけりや。さもいたり深く、さすがに気色ありし人のありさまかな。」(葉上・119頁)

(3)〇「いくばくならぬ手の限りもとどめたてまつるべき。二の宮、今より気色ありて見えたまふを」などのたまへば、
(葉下・191頁)

(4)〇「をかしきことかな。何心ありて、いかなる人をかは、さて据ゑたまひつらむ。なほいと気色ありて、なべての人に似ぬ御心なりや。」(浮・107頁)

(5)〇「式部がところにご、気色あることはあらむ。すこしづつ語り申せ」と責められる。(帚・161頁)

(6) 〇まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ。(顔・242頁)

(7) 〇「齋院をもなほ聞こえ犯しつつ、忍びに御文通はしなどして、けしきあることなど、人の語りはべりしをも、世のためのみにもあらず、」(賢・139頁)

(8) 〇若やかに、けしきあるさぶらひの人なりけり。かくあはれなる御住まひなれば、かやうの人も、おのづからもの遠からでほの見たてまつる御さま容貌を、いみじうめでたしと涙おとしをりけり。(須・187頁)

(9) 〇まことや、かの見物の女房たち、宮のには、みな気色ある贈物どもせさせたまうけり。(胡・166頁)

(10) 〇「かの親王より外に、また言の葉をかはずべき人こそ世におぼえね。いと気色ある人の御さまぞや」と、若き人はめでたまひぬべく聞こえ知らせたまへど、(胡・168頁)

(11) 〇思すさまのことはまばゆければ、えうちいでたまはず。気色ある言葉は時々ませたまへど、見知らぬさまなれば、(胡・174頁)

(12) 〇「さすがにいと気色あるところつきたまへる人にて、」(常・229頁)

(13) 〇「この君のまみのいとけしきあるかな。小さきほどの児をあまた見ねばにやあらむ、かばかりのほどは」(横・338頁)

(14) 〇いとけしきある深山木にやどりたる鶯の色ぞまだ残りたる。(宿・450頁)

(15) 〇「私にとぶらふべき人のもとに参うで来るなり」といふ。「私の人にや艶なる文はさし取らする。けしきあるまうとかな。もの隠しはなぞ」と言ふ。「まことは、この守の君の、御文女房に奉りたまふ」と言へば、言違ひつうあやし、と思へど、ここにて定めいはんも異やうなべければ、(浮・162頁)

(16) 〇げに、いと荒々しくふつつかなるさましたる翁の、声唖れ、さすがにけしきある、「女房にもものとり申さん」と

言はせれば、(淳・174頁)

(17)〇気色ある文かな、と見たまひて、

橘のかをるあたりはほととぎすころしてこそなくべかりけれ(蜻・213頁)

(1)は、藤裏葉の巻「宴深更に及び、夕霧、酔を装い宿を求める」条。以下、小学館『全集』による。「その面持ちはいわくありげな風情で」と現代語訳している。(2)は、若菜上の巻「源氏、入山を知り、奇しき宿世を思う」条。「それでいて風格のあるお人柄であった」と現代語訳する。明石の御方と源氏が、明石入道について語る部分。一風変わった入道の人柄を暗示する装われた表現でもあるが表向きはそうではない。(3)は、若菜下の巻「源氏、夕霧とともに音楽について論評する」条。「今からその才がおありのような気配ですが」と現代語訳する。源氏に「二の宮の音楽の才能をほめられ、明石の御方は涙ぐむ。(4)は、浮舟の巻「匂宮、大内記から薫の隠し女のことを聞く」条。「やはり、ほんとうに一癖あって、」と現代語訳する。頭注に「薫が、謹厳ぶっていながら、裏には好色な行爲のあることへの皮肉をはらんだほめ言葉」とある。

(5)は、帚木の巻「式部丞の体験談——博士の娘」の条。頭注に「いっふう変わった。おもしろい。」とある。(6)は、夕顔の巻「物の怪、夕顔の女を取り殺す」条。頭注に「様子の変わった、風変りな」、現代語訳に「奇妙な鳥がしわがれた声で」とある。青表紙本系統の池田本はこの語を補入している。(7)は、賢木の巻「大臣の報告を聞き、弘徽殿源氏放逐を画策」の条。現代語訳に「あやしい気配があつて」とある。(8)は、須磨の巻「六条御息所と文通 花散里への配慮」の条。頭注に「御息所は、教養が高く洗練された趣味を持つ人。したがってその侍も主人にふさわしい心の持主であることを語っているのであろう」とある。現代語訳に「若々しく気持のよい侍人」とする。玉上「評釈」も「若々しい気味のきいた御家来」(第三巻 89頁)。谷崎『新々訳』「まだ年の若い、心得のありそうな侍の人」(巻三 30頁) 与謝野

『源氏』「若やかな気持のよい侍」(河出・上巻 155頁) などとする。また、岩波『大系』は、「若々しくて様子の立派な」(二・35頁)、新潮『集成』は、傍注に「たしなみのある」(二・33頁) と注記する。ところが、吉沢『新釈』は、頭注に

一ふしある。河内本の如く「気色ばめる」とある方がよく聞える。(巻二 32頁)

と注記する。この異文は注意すべきである。『大成』所収の河内本系統の六本、別本系の陽明文庫本は「けしきはめる」、別本系の御物本は「けしきはみたる」となっている。穂久邇文庫本も「けしきはめる」(須磨 三五ウ・貴重本刊行会『源氏物語』(一) 582頁) とある。穂久邇文庫蔵『源氏物語聞書 覚勝院抄』(汲古書院) は、青表本系統の諸本と同じ「けしきある」(第七冊三二オ 第三巻 333頁) となっている。青表紙本系統の諸本対河内本系統の諸本・別本系諸本という異文の対立は、吉沢義則氏の『新釈』頭注の注記とともに注意しなければならない。青表紙本による読解は、「かやうの人も……涙おとしをりけり。」という文脈を辿っていくと、やや難点がある。「けしきばめる」が適切のように思われる。(9)は、胡蝶の巻「中宮の季の御読経 紫の上春秋競べに勝つ」条。現代語訳に「みごとな贈物」とある。(10)は、胡蝶の巻「源氏、人々の懸想文を見て玉鬘に語る」条。現代語訳に「ほんとうにおもしろいところのあるお人柄」とある。(11)は、(10)と同じ条。頭注に「岷江入楚」を引き「源の心にけさうはあれども、さすがに打いでにくきを、うちなげきなどするさまなり」とする。現代語訳に「意味ありげな言葉」とある。(12)は常夏の巻「内大臣、源氏に反発しつつ娘のことに苦慮」の条。現代語訳に「ほんとうに一癖おありの人」とある。別本系の御物本は「けしきところ」となっている。(13)は、横笛の巻「無心の薫の姿に 源氏はわが老いを嘆ずる」条。頭注に「岷江入楚」を引き「何とやらん。ただならぬ所のあるなり」とする。現代語訳に「一癖ありげ」とある。(14)は、別本系の阿里莫本が「けしきあり」の異文を持つ。(15)は、浮舟の巻「薫、随身の探索により初めて秘密を知る」条。現代語訳に「仔細のありげなお人」とある。

(6)は、浮舟の巻「内舎人、薫の命により警備の強化を伝達す」の条。頭注に「しわがれ声は、無気味で恐怖感を与える。」とする。現代語訳に「さすがにただ者とは見えぬ風体なのが」とある。別本系の高松宮家本、国冬本は「けしきあり」の異文を持つ。(7)は、蜻蛉の巻「薫匂宮を見舞う。浮舟の密通を思い煩悶す」条。頭注に「薫の歌で匂宮が暗に当てこすられたことを思う。」とする。現代語訳に「意味ありげな手紙」とある。

以上、「源氏」の用例を検討した結果から考えると、「気色あり」の語意は、小学館『日本 国語大辞典』や『角川 古語大辞典』のいずれにもより難いようである。両辞典の語意を整理して、

① 物語の起るきざし。兆候。不気味な感じのするさま。いっふう変った趣。あやしげだ。

② 興味をささうものがある。おもしろい。

とするのが適切であると思量する。これは、小学館『新選 古語辞典』(中田祝夫編)が、語意を三つに分類して、「① 趣がある。おもしろい。」「② 怪しい。」「③ ……といった趣がある。松に藤蛸木にのぼる——り△宗因▽」としているのが、最も適切であると考えての整理にはかならない。①の語意の細分化は、微妙に重なる面があってなかなか分類が困難であるように思う。そのような意味の分類によって用例の意味と、誰が誰に対して用いているかを一覧にまとめると、次のようになる。

資料番号	意味	誰が	誰に対して
(1)	①	作者	夕霧
(2)	②	源氏	明確入道

資料番号	意味	誰が	誰に対して
(3)	②	源氏	明石御方の孫、二宮
(4)	①	匂宮	薫

(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)
㊦	㊥	㊤	※ ㊤	㊦	㊦	㊥
作者	源氏	作者	作者	右大臣	源氏	頭中将
源氏	兵部卿の宮	中宮付の 女房	御息所の 使者	源氏	鳥の声	式部丞 (手紙)

(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)
㊦	㊦	㊦	㊦また は㊥	㊦	㊦
匂宮	作者	薫隨身	作者 △薫心情▽	源氏	内大臣
薫の手紙	内舍人	匂宮の使者	八宮邸 老木	薫	源氏

※本文に問題がある。

これによれば「㊥」の「興趣をさそふものがある。おもしろい」の意に用いられているのは、明石の入道、明石の御方の孫、式部丞の女からの手紙、六条御息所の使者、明石中宮付の女房、兵部卿の宮などに限られ、源氏、夕霧、薫などに対しては、一貫して㊦の意味で用いようとする用語意識が明確であり、宇治十帖には「㊥」の意味で用いられている語例は全く存在しない。(4)は、「薫が謹厳ぶつていながら、裏には好色な行為のあることへの皮肉をはらんだほめ言葉」であるが、(14)は、(4)との関わりをなかで読んでいく必要がある。物語は、薫が「こだに」などを少し引き取らせて、中君に差しあげようとする場面に続く。好色心を抱く薫を物語の作者が、やはり皮肉なまなざしで捉えている。それは(11)で、玉鬘に懸想する源氏の好色心を作者が、「気色ある言葉」と捉えているのと全く同じ視線である。しかも、物語の対偶的な意識や構想は、夕顔と浮舟・某の院と宇治八宮邸の植込みという構成、構図を形成している。用例(6)と(14)は、

このように奥深い世界で関わる。(14)は、薫の心情と深くとけ合った象徴的な自然である。情景描写と薫の心理描写とが渾然となっている場面である。それは、いずれも怨霊や妖怪の住みつく場所でもあった。吉沢『新釈』（平凡社）や山岸『大系』（岩波書店）などの注釈を否定した現代の「源氏学」は大きな錯誤をおかしているといわざるを得ない。「源氏物語」の世界は、本文の異同をも目配りのなかに置いて、このようにしたたかに操られた作者の用語意識を、注意深く「読み」解いて、享受していかねばならないのである。(未完)